同窓生が語る宮澤賢治

盛岡高等農林学校と松田甚次郎・宮澤賢治（3）
松田甚次郎、花巻の宮澤賢治を訪ね、帰郷する。賢治の訓え「小作人たれ」「農村劇をやれ」

若尾　紀夫（C昭39・院41）

松田甚次郎（以下：甚次郎）は、大正15年４月に盛岡高等農林学校農学別科に入学し盛岡で一年間すごし、卒業（昭和２年３月）を間近に生前の宮澤賢治（以下：賢治）を花巻に訪ね、また賢治が亡くなった後も花巻や盛岡等を頻繁に訪れている（11）。甚次郎と賢治が出会った頃（大正15年～昭和２年）は旱魃大凶作であり、また賢治は花巻農学校を辞めて羅須地人協会を設立した時期であった（17）。

花巻を訪れた甚次郎（昭和２年３月８日）は、賢治から「小作人たれ」「農村劇をやれ」と激励され、郷里山形新庄に帰り自ら小作人となり、賢治精神を実践し農村指導者として活動した。

松田甚次郎著『土に叫ぶ』

昭和13年５月、甚次郎は回顧録『土に叫ぶ』（羽田書店）を出版した（２）（写真１）。『土に叫ぶ』は出版と同時に大きな反響を呼びベストセラーとなり、また新国劇として上演（東京有楽座）されるなど、甚次郎の名前は全国に知れわたった。

『土に叫ぶ』は「序」と「１章～14章」からなる。１章の「恩師宮澤賢治先生」は、「先生の訓へ・先生

写真１　松田甚次郎著『土に叫ぶ』

表１　松田甚次郎と生前の宮澤賢治に関わる略歴（大正15年～昭和８年）

和 暦	年 齢	時 期	松田甚次郎と宮澤賢治
大正15	17歳	３月	山形県立村山農学校を卒業する。
（昭和元年）		4月 1日	賢治の新聞記事「岩手日報」:「新しい農村の建設に努力する」
		4月10日	盛岡高等農林学校・農学別科（１年間修学）に入学する。
		12月25日	旱魃で苦しむ岩手県紫波郡赤石村を見舞い、子供達に南部煎餅を配る。
昭和２	18歳	2月 1日	賢治の新聞記事「岩手日報」:「農村文化の創造に努む」
		3月 8日	須田仲次郎と賢治を訪問、「小作人たれ・農村劇をやれ」との教訓（１回目）
		3月15日	盛岡高等農林学校・農学別科を修業し、山形県新庄鳥越部落に帰郷する。
		４月	父親より六反歩の旱魃田を借りて小作人となる。
		4月25日	「鳥越倶楽部」を立ち上げる。
		8月 8日	農村劇の脚本を持ち賢治を訪問、題名「水涸れ」は賢治が命名（２回目）
		9月10日	鳥越八幡神社境内に土舞台をつくり、農村劇「水涸れ」を上演する。
昭和３	19歳	8月10日	賢治健康を害し自宅療養、羅須地人協会を中断する。
		8月14日	花巻に賢治を訪問する（３回目？）。
昭和６	22歳		賢治から手紙を添えて「春と修羅」（昭和６年２月の署名）が贈られる。
昭和８	24歳	9月21日	賢治逝去する（享年37歳）。

の詩・先生逝かる・村へ帰る・百姓姿」から構成されている。「序」の文章には、甚次郎の思想が明確に描かれている。また賢治を訪問した時の状況や賢治の有名なことば「小作人たれ」「農村劇をやれ」を語ったときの様子が、甚次郎自身の手で克明に書かれており、賢治によって甚次郎がどのような影響を受けたかなど甚次郎の想いが感じられる。

ここで紹介する「序」及び「恩師宮澤賢治先生」(２)を精読することによって、甚次郎と賢治との出合いの状況や帰郷後に「帰農の人」となる覚悟を伺い知ることができる。全文を紹介する。(旧漢字は常用漢字に変換)

「序、一：恩師宮澤賢治先生、二：郷土・鳥越部落、三：村芝居、四：隣保館、五：婦人愛護運動、六：精神鍛練の実修、七：我家と私、八：私の農業経営主義と実績、九：最上共働村塾、十：日本共働奉仕団の結成、十一：農村啓蒙行脚、十二：来訪者を語る、十三：善き父と善き友を語る、十四：農村最近の動向と時局」

序

雪に埋れ勝ちな東北の一介の若い農民である私は、いつまでも、どこまでも、黒い土を耕し、土を愛し、万物の生育に賛じて、黙つて生きてゆくべきてあると固く信じてゐる。

本春、農地調整法案が衆議院に上程の日、帝国議事堂で敬愛する羽田書店主と会つた。同氏は長野県選出の衆議院議員でもある。その時、私に十年の生活記録を是非書いてくれとのことである。けれども私は筆の人ではない。鍬の人であり、語る人ではなく、働く人である。書くことも、まとめることも出来ないと思つたが、羽田氏の農村の行末を思ふ切なる熱意に動かされ、帰郷後に熟考して、私のやうなものが書いたものでも皇国と農村の弥栄にいくらかでも役たつならばと、最善をつくして書くことを心にきめた。

私は十九歳の春から今日まで、土に親しみ、土に愛されながら、一つの目標に向つて強い声なき叫びを続けて、正直に一生懸命に働いて来た。そして多くの理解ある援助者のお陰で、一人でも多くの人に涙を流し、血も注ぐことが出来た。或は失敗したと笑はれたり、一蹴されたりして来たが、私の土の中からの叫び、信念はいつも弥増して今日に至つて居る。

僅かの年月ではあるが、私はこゝに静かに反省して、更に大きな力と、強い熱とをもて、土に生き、よき郷土の建設を追い進みゆくことを固く誓ふものである。

黒い土、暖い土、それは人間の生命の源泉である。

強く叫んで弥が上にも働くべきである。そして村々にゐる農民お互ひも、町にある農村の子孫たる市民も、国土を守り、国本を固くすべきときである。

出羽の国の山村のわが家にて、旧正月元日、吹雪を外にして、沈思黙考の後静かに筆を執り、生命を打込んで書いた。今日ではや五十日目である。

昭和十三年春 出羽国鳥越邑にて　農 松田甚次郎

一、恩師宮澤賢治先生

先生の訓へ　昭和二年三月盛岡高農を卒業して帰郷する喜びにひたつてゐる頃、毎日の新聞は、旱魃に苦悶する赤石村（注：現 紫波郡紫波町）のことを書き立てゝゐた。或る日私は友人（注：須田仲次郎）と二人で、この村の子供達をなぐさめようと、南部せんべいを一杯買い込んで、この村を見舞つた。道々会う子供に与へていつた。その日の午後、御礼と御暇乞ひに恩師宮澤賢治先生をお宅(写真２)(注)に訪問した。

注：この建物(移築復元)は明治45年に賢治の祖父(宮澤喜助）が建てた隠居所で、もともとは下根子桜（現在の花巻市桜町）にあった。賢治は大正15年３月に花巻農学校を退職し、この建物で農耕自炊生活をはじめ羅須地人協会を設立した。

先生は相変らず書斎で思索にふけつてをられた。宮澤先生は明治二十九年の生れで、同県花巻町の豪家の長男であつた。盛岡高農の逸材で、卒業後花巻の農学校に教鞭をとる傍ら、生徒に農民詩の指導等をやつて居られた。故あつてそこを辞されて自ら鍬取る一個の農夫として、郊外下根子に「羅須地人協会」といふのを開設し、自ら農耕に従つた。毎日自炊、自耕し、或は音楽、詩作、童話の研究に余念なく、精魂の限りを尽された。そして日曜や公休日には、農学校の卒業生や近隣の青年を集めて、農村問題や肥料の話などをしながら、時にはレコードやセロを聴かせて、時には自作の詩を発表した。或る時は又農民劇の脚本を書いて農民劇をやらしたりした。

土壌学の研究では高農の教授が教えを受けに来る程まで造詣が深く、徹夜して険阻な山を登破し研究されたこともある。「百姓に石灰肥料を安く供給したい」と、石灰岩の地質の研究に志し、愛のため真理探究のため、二年間石灰岩の採掘に従事されたこ

写真２　花巻農業高等学校敷地にある羅須地人協会の門標（左）と建物（復元）（右）

ともあつた。実に熱心で、実践家であつた。三十八歳で夭折されたのも、芸術と科学の真理の前に身命を賭した為かとも思はれる。極めて謙遜な、質朴な、しかも厳粛なところもある宮澤先生の前には、誰でも敬虔の念を禁ずることは出来ぬ。

赤石村を慰問した日のお別れの夕食に握飯をほゝ張りながら、野菜スープを戴き、いゝレコードを聴き、和かな気分になつた時、先生は厳かに教訓して下さつた。この訓へこそ私には終生の信條として、一日も忘れる事の出来ぬ言葉である。先生は「君達はどんな心構えで帰郷し、百姓をやるのか」とたづねられた。私は「学校で学んだ学術を、充分生かして合理的な農業をやり、一般農家の範になり度い。」と答えたら、先生は足下に「そんなことでは私の同志ではない。これからの世の中は、君達を学校卒業だからとか、地主の息子だからとかで、優待してはくれなくなるし、又優待される者は大馬鹿だ。煎じ詰めて君達に贈る青葉はこの二つだ―

一、小作人たれ

二、農村劇をやれ」

と、力強く言はれたのである。語をついで、「日本の農村の骨子は地主でも無く、役場、農会でもない。実に小農、小作人であつて将来ともこの形態は変らない。不在地主は無くなつても、土地が国有になつても、この原理は日本の農業としては不変の農組織である。社会の文化が進んで行くに従つて、小作人が段々覚醒する。そして地位も向上する。素質も洗練される。従つて土地制度も、農業政策も、その中心が小作人に向かつて来ることが、我が国の歴史と現有の社会動向からして、立證できる。そして現在の小作人は、封建時代の搾取から、そのまゝ伝統的な搾取がつゞけられ、更に今日の資本主義的経済機構の最下層にあつて、二重の搾取圧迫にあへいで居るのだ！　この最下層の文化、経済生活をしのびつゝ、国の大道を躬行し、食糧の産業資源を供給し、更に兵力の充実に貢献して居るではないか！　なんと貴く偉大な小作農民ではないか！　日夜きゅうきゅうとして、血と汗を流して、あらゆる奉公と犠牲の限りを尽している。ところがこの小作人に、真の理解と誠意を持つものは、一人もないのだ。

皆んな卑しんで見下げて、更に見殺さうとまでしてゐるのだ。こんなことで日本の皇国が栄え続けて行けるか。日本の農村が真の使命に邁進して行けるか。君達だつて、地主の息子然として学校で習得したことを、なかば遊び乍ら実行して他の範とする等は、もつての他の事だ。真人間として生きるのに農業を選ぶことは宜しいが、農民として真に生くるには、まず真の小作人たることだ。小作人となつて粗衣粗食、過労と更に加はる社会的経済的圧迫を体験することが出来たら、必ず人間の真面目が顕現される。黙つて十年間、誰が何と言はうと、実行し続けてくれ。そして十年後に、宮澤が言つた事が真理かどうかを批判してくれ。今はこの宮澤を信じて、実行してくれ。」と、懇々と説諭して下さつた。私共（注：甚次郎と須田仲次郎）は先覚の師、宮澤先生をただただ信じ切つた。

「次に農民芝居をやれといふことだ。これは単に農村に娯楽を与えよ、といふ様な小さなことではないのだ。我等人間として美を求め美を好む以上、そこに必ず芸術生活が生れる。殊に農業者は天然の現象にその絶大なる芸術を感得し、更らに自らの農耕に、生活行事に、芸術を実現しつゝあるのだ。たゞそれを本当に感激せず、これを纏（まと）めずに散じてゐる。これを磨きこれを生かすことが大事なのである。若しこれが美事に成果した暁には、農村も農家もどんなにか楽しい、美しい日々を送り得ることであろうか―と想ふ。そこから社会教育も、農村の娯楽も、農民啓蒙も、婦人解放も、個人主義打開も、

実現されて来る。村の天才、これは何処にも居る。歌作りの上手な人、歌を唄ふことの上手な人、踊りの上手な人、雄弁家の青年、滑稽の上手な人等々、数限りもなく居るのだ。これを一致させ、結び綜合し、統制して一つの芝居をやれば、生命を持つて来るのだ。その生命こそあらゆる事業をも誕生せしめ、実現させて行くことになるのである。喜び乍ら、さんざめき乍ら、村の経済も、文化も向上して行く姿が見えるではないか。

そしてこれをやるには、何も金を使はずとも出来る。山の側に土舞台でも作り、脚本は村の生活をそのまゝすればよい。唯、常に教化といふことゝ、熱烈さと、純情さと、美を没却してはいけない。あく迄も芸術の大業であることを忘れてはならない。」と懇々教へられた上、小山内氏の『演劇と脚本』といふ本をくださつた。そしてこれをよく研究して、青年達を一団としてやる様にと、事こまごまとさとされた。つい時の過ぎるのを忘れ、恩師の温情と真心溢るゝ教訓に、首を垂れたものであつた。

考へて見れば本当に今の農村の指導者は、一人として小作人に成り切つた心持でやつて居る者はいない。農村劇など考へもつかぬ。歌や俳句ばかりが、唯一の農村の芸術と考へるのが一般の認識だ。十年先のことを明察して居られる恩師の偉大さが、故人となられて一人深く感ぜられ、愛慕の念にかられるのである。

先生の詩　故宮澤先生を偲ぶの情にたへず、二つの詩を記すことにする。

農夫の朝（草刈）
冷いのに刈れと言ふのか
眠いのに刈れと言ふのか

雲の信號
あゝいゝなせいせいするな
風が吹くし
農具はぴかぴか光つてゐる
山はぼんやり
岩頸だつて岩鐘だつて
みんな時間のないころの夢を見てゐる
　その時雲の信號は
　もう青白い春の
　禁欲のそら高く掲げられてゐた
山はぼんやり
きつと四本杉には
今夜は雁もおりて來る

も一つ先生のなくなった後、手帖に発見された詩を添へて置く。

雨ニモマケズ／風ニモマケズ／雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ／丈夫ナカラダヲモチ／欲ハナク／決シテ瞋ラズ／イツモシヅカニワラッテヰル／一日ニ玄米四合ト／味噌ト少シノ野菜ヲタベ／アラユルコトヲ／ジブンヲカンジョウニ入レズニ／ヨクミキキシワカリ／ソシテワスレズ／野原ノ松ノ林ノ蔭ノ／小サナ萱ブキノ小屋ニヰテ／東ニ病氣ノコドモアレバ／行ッテ看病シテヤリ／西ニツカレタ母ガアレバ／行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ／南ニ死ニサウナ人アレバ／行ッテコハラガラナクテモイヽトイヒ／北ニケンクワヤソショウガアレバ／ツマラナイカラヤメロトイヒ／ヒドリノトキハナミダヲナガシ／サムサノ夏ハオロオロアルキ／ミンナニデクノボートヨバレ／ホメラレモセズ／クニモサレズ／サウイフモノニ／ワタシハナリタイ

先生逝かる　清浄なるかな宮澤先生―、その後昭和三年にも一度お目にかゝつて教へを受け、昭和六年には「わたしはもうこの生命が終り近い。」といふ意味のあるお手紙を下され、昭和八年秋（注：昭和８年９月21日）大きな足跡を残して逝かれて了つた。

短い人生に、先生は詩作の他に自作の詩に作曲したものも幾つか残された。又科学方面では石灰岩の土壌学的研究を発表され学界に貢献した。よく人を教へ導き、常に御自分の潔白を守り、三十八歳で独身で童貞を通されこの世を終られた神に近い高潔な人格者であられた。黙々として深く掘り下げられた根強い生涯であられた。

恩師の相、今は宮澤賢治全集の出版も見、岩手の生んだ最もすぐれた芸術家であり、道徳家であり、科学者であつた。自分の様な一書生が、このよき大いなる人を恩師として仰ぐことが出来、知遇をかたじけなくした事を感謝しつゝ拙ない本書を通して、恩師の余薫を、全国青少年諸賢の胸に、強く、深くしませたい。

村へ帰る　青い北上川、雄々しい岩手山に別れを告げ、帰農の決意を固めて、我が故郷、鳥越部落に帰つた。ざら雪をさくさくと踏み、背中には落日近い夕陽を一ぱいに浴びて、堆肥運びをすませて家路に急ぐ人々。音もなく動搖もなく橇路を、すうーすうーと滑つて行く馬橇。ぢつとこれを見つめ乍ら、こうした人生の軌道を！と祈り、希ひ、心に誓ひつゝ村の人となつたのだ。

雪融頃の村は朝夕こそ寒いが、昼間は春の陽射し

で、雪どけがひどい。雪融け水が午後二時頃から洪水して来る。街に通ずる本通は藁屑や馬糞で汚されて、橇も車もこれに邪魔されて滑らない。ところが少し離れた町では路上の雪がすつかり消えて車が通じてゐる。都会と農村とは全く絶交である。大雪で絶交し、吹雪で絶交し、更にこの雪融期一ケ月は交通が杜絶して不便を極める。―だが、都会の農村搾取だけは、一日として止まることはない。

百姓姿　高農生活の名残りであるサージの制服やカーキ色の作業服、制帽などを清算し、黒木綿の股引、縞のハッピ、粗織紺の前掛になつて、制帽はタオルと蒲の稈で作った山刀切帽にかへて、全く活動的な農装となつた。その姿は町へ行くにも、山へ行くにも変りはない。ハンバキ（脚絆）をはき、藁靴をはいて活動を始めた時の嬉しさと、父から六反歩の旱魃田の小作を許された時の喜びは何と言つて言ひ現してよいかわからぬ。

かうして私は帰農の人となつたのである。（引用以上）

甚次郎と賢治との出会い

甚次郎の来盛とイーハトーブの旱魃旱害

大正15年の春、甚次郎は盛岡高等農林学校農学別科に入学（入学式：４月８日）するため山形新庄から遠く盛岡までやってきた。

「松田甚次郎の日記（大正15年４月７日）」には下記の記録がみられるので、甚次郎は遅くとも４月７日には盛岡に移住している（19）。

大正15年４月７日（水）　R6 B10

morning play
after preposition
9 oclock for 泉田
at 泉田　休

10 for 騎兵24隊
沼澤重雄君と再会
after noon 農林
　　見物
town 見物
play

初の盛岡は不？でした.
Fatherは、泉田に泊
今後、一ヶ年は麗はしき泉田
方にて、日日をすごします.
幸運を祈る。天満宮
　　明は愈々たり.

この日記は次の様に解釈できる。「大正15年４月７日（注：R6 B10は不明）、９時に泉田方（注：盛岡の下宿先か）に向い休息する。10時に騎兵24連隊の沼澤重雄と再会し、午後には盛岡高等農林学校と盛岡の街を見学した。父親は泉田方に宿泊（注：父親も一緒に来盛したのか）。今後一年間は泉田方で過すことになる。天満宮（注：鳥越天満宮か）に幸運を祈願した。」

この年は「イーハトーブを襲った旱魃旱害による農村農民の悲惨な状況」であった。盛岡に来た甚次郎は、新聞紙上で連日報道される旱魃旱害の記事を読み、旱魃旱害の渦中に身を置いてイーハトーブ農村農民の悲惨な状況に心を痛めた（17）。

賢治「本当の百姓」になりたい

大正15年の大旱魃旱害の状況下にあって、当然、賢治は自分の足下で起っていることを見聞きしていた。花巻農学校在職の賢治は「本当の百姓」になりたいとの思いで、農学校を依願退職（大正15年３月31日）、羅須地人協会を設立したが、「病気」と「陸軍特別大演習」に伴う「アカ狩り」のため約２年の活動をもって終焉することになる（大正15年８月16日～昭和３年８月10日）（17）。

甚次郎が、「農学校教師時代」でもなく、「東北砕石工場技師時代」でもなく、「本当の百姓」になりたいとの想いで下根子桜で活動した「羅須地人協会時代」に、「百姓賢治」と邂逅したことが重要なポイントであり、甚次郎の生涯を決定することになる。

甚次郎はどのような経緯で賢治のことを知ったのか

甚次郎、花巻に賢治を訪問する

岩手日報に「旱魃旱害による農村農民の悲惨な状況」が連日報道された。また「新しい農村の建設に努力する」（大正15年４月１日）、及び「農村文化の創造に努む」（昭和２年２月１日）との賢治の記事が掲載された（17）。

その新聞記事の要旨は「花巻農学校を辞した宮沢先生、新しい農村の建設に努力する。農村経済の勉強と耕作をし芸術の生きがいを送りたい。」、及び「あらたな農村文化の創造に努力し、現代の悪弊である

都会文化に対抗して農民の一大復興運動を起こし、田園生活の愉快を味わい原始人の自然生活にたち返る。」である。盛岡に来た甚次郎は旱魃旱害に関心を抱き、その新聞記事を読み心痛めた。この羅須地人協会設立に寄せた新聞記事が、甚次郎と賢治との出合いのきっかけになった。

「松田甚次郎の日記（大正15年12月25日）」の記録（20, 21）
9. 50　for 日詰　下車　役場行
赤石村長ト面会訪問　被害状況
及策枝国庫、縣等ヲ終ッテ
国道ヲ沿ヒテ南日詰行　小供ニ煎餅ノ
分配、二戸訪問慰聞　12. 17
for moriork ？ ヒテ宿へ
後中央入浴　図書館行　施肥　no?t
at room play　7. 5 sleep
赤石村行ノ訪問二戸？戸のソノ実談の
聞キ難キ想惨メナルモノデアリマシタ.
人情トシテ又一農民トシテ吾々ノ進ミ
タルモノナリ決シテ？ノタメナラザル？
明ナルベシ　12. 17　の二乗ラントテ
余リニ走リタルノ結果足ノ関節がイタクテ
困ツタモノデシタ
快晴　赤石村行　大正天皇崩御（注：この日に大正天皇崩御）

甚次郎は、この日（12月25日の午前）、親友須田仲次郎（写真３）を伴い（注：須田仲次郎の名前は記載されていないが、恐らく同伴したと思われる）日詰に行き、大旱魃で悲惨な状況の赤石村を慰問した。その時、南部煎餅を一杯買い込んで国道を南下し、それを子供等に配って歩き、帰盛する時に12：17分の汽車に乗るため大部走ったので足の関節を痛めたという。従って甚次郎は慰問後は直接盛岡に戻り花巻には行っていない。

甚次郎は大正15年12月25日に下根子桜を訪れたとされているが、後に述べるように日程的にあり得ない（５）。『土に叫ぶ』では昭和２年３月８日の午前に赤石村を慰問し、午後に下根子桜に賢治を訪問したとされているが、前記したように赤石村慰問は12月25日であるので、甚次郎の記憶違いであろう。

農学別科修業（昭和２年３月15日）を間近にひかえた甚次郎は、昭和２年３月８日の午後（11時半頃とも言われる）（10, 14）、賢治に会うために花巻の下根子桜の羅須地人協会を訪れた。これが最初の訪問である。

「松田甚次郎の日記（３月８日・火・晴）」の記録（14, 20, 21, 23）
忘ルルナ今日ノ日ヨ、Rising sun ト共ニ
reading
9.　for mr 須田（注１）花巻町
11. 50　桜の宮沢賢治氏面会
1.　戯、其他農村芸術ニツキ、
2.　生活　其他　処世上
　unpple
2. 30.　for morioka 運送店
stobu 定盛先生行（注２）
nignt 斎藤君（注３）

今日の喜ビヲ吾の幸福トスル宮沢君の
誠心ヲ吾人ハ心カラ取入ルノヲ得タ.
実ニカクアルベキ然ルベキナルカ
吾ハ従ツテ与スベキニ血ヲ以ツテ尽力スル
実現ニ致ルベキハ然ルベキナリ
おゝ郷里の方々！地学会、農芸会
此の中心ニ我々のなすヲ見よ.
現代の農村生活ヲ活カスノダ
＊天候欄「晴」、予記欄「関西大地震」、特別事項欄「花巻行」
＊「戯」：戯曲
＊「関西大地震」：７日の丹後大地震（死者：京都府3,500人余）

注１：甚次郎と同期の須田仲次郎（写真３）
注２：定盛兼助教授（写真４）
- 盛岡高農農学科 明治41年卒業（第３回生）
- 大正12年赴任：盛岡高農農学科教授（１）
  担当科目：農学大意・園芸・農場実習
  実験農場園芸部種芸部主任：農学別科主事
- 大正15年11月：盛岡高農農学科教授（１）
  担当科目：園芸学・同実験・農場実習
  実験農場主事・農学別科主事
- 昭和18年７月16日：定年退職

注３：甚次郎と同期の斎藤正義（写真５）

甚次郎はいつ生前の賢治を訪問したのか

賢治の年譜等の資料や甚次郎の証言『土に叫ぶ』からみて、甚次郎は生前の賢治を３回訪ねたと考えられる。ところが５回との説もある。

大正15年12月25日に甚次郎は賢治を訪問したとの説（５）があるが、賢治はその年の12月２日～29日には上京し花巻にはいなかったので、訪問は物理的に不可能である。

昭和２年２月１日の訪問は、同日の新聞記事をみ

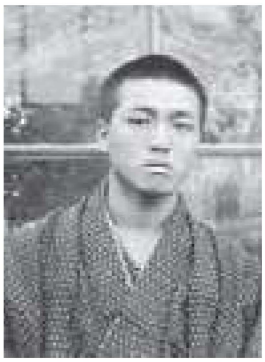

写真３　甚次郎と同期の農学別科 須田仲次郎

写真４　農学別科主事の定盛兼助教授

写真５　甚次郎と同期の農学別科 斎藤正義

て甚次郎が花巻に賢治を訪問したとする説である（8, 12）。なぜそのような説が言われたのか？　『土に叫ぶ』に記載されている「御礼（何のお礼？）と御暇乞ひ（前に会ったので、その暇乞い？ 初めて会った人に対するものではない？）及び「先生は、相変らず、書斎で思索にふけつてをられた（以前に会い賢治の生活を知っている？）」の文章から、甚次郎は、昭和２年３月８日以前にも賢治を訪れていたのではないかと推測した結果であろう。具体的な記録が見られないので、これら説は否定的である。

つまり「御礼と御暇乞ひ」の言葉からは、甚次郎は昭和２年３月８日以前に賢治に会っていたのではないかと聞き取れる。しかし、実際には甚次郎は昭和２年３月８日に賢治に初めて会うのである。甚次郎は「新聞紙上に掲載された賢治の存在や活動を見聞きして大いに関心を持ち、それに共感した」ので、その自分の感謝の気持ちを直接伝え、また間もなく農学別科を卒業し帰郷する旨を告げたのではないかと推察できる。また甚次郎が「書斎で、相変らず、思索にふけっている」賢治の姿を事前にしばしば訪問して見たことはあり得ないので、「相変らず」とは甚次郎の想像であろう。このように考えればその文脈は理解できる。

昭和２年３月８日（１回目）、甚次郎と親友須田仲次郎は下根子桜の羅須地人協会に賢治を訪ねた。その時の様子を次のように追想「宮澤先生と私」している（3）。賢治は２人を歓迎して羅須地人協会建物の２階に通し、レコードをかけ、また自らセロを演奏してもてなしたという。

「花巻町を離れたある松林の二階建ての御宅（写真２）、門をたゝいたら直に先生は見えられて親しい弟子を迎ふる様ななつかしい面持ちで早速二階に通された。明るい日射の二階、床の間にぎつしり並むでる書籍、そこに立てられて居るセロ等がたまらない波を立てゝ私共の心に打ち寄せて来る。東の窓からは遠く流れてる北上川が光つて見えてる。ガラスを透して射し込む陽光はオゾンが見える様に透徹して明るいのである。‥（中略）‥かくして私共は、慈父に久し振りで会ふた様な、恩師と相語る様にして下さつたあの抱擁力のありなさる初対面の先生にはすつかり極楽境に導かれてしまつた。それから度々お訪ねする機（注：検証が必要）を得たのであるが、先生はいつも笑つてにこにこして居られ、文化はありがたいものだ、此処に居てロシアの世界的なピアノの名曲を聴かれるとてロシアの名曲を聴かしてくだされたり、セロを御自ら奏して下さつたものである。」

２回目の訪問は昭和２年８月８日になる。昭和２年４月に郷里新庄に戻った甚次郎は、父親から六反歩の旱魃田を借り小作農をはじめた。そして賢治に誓った農民劇の実現のために同年、村の青年有志を集めて鳥越倶楽部を結成した。秋の村祭りに劇の上演を企画。田植後の水不足の辛苦をもとに脚本を書いたが、満足できず「かういふ時こそ宮澤先生を訪ねて教を受くべきだ。」と自作の脚本をもって花巻に賢治を訪ね、賢治の助言を仰いだ（14）。

「松田甚次郎の日記（昭和２年）」によると、甚次郎は遅くとも前日（注：８月７日）の夜に盛岡に到着し一泊、翌８日に賢治を訪問した（14, 20）。

農村青年ノ今後　彼モ力ナル
ベキヲ与フレバマタ現在モ？大シ
メルノミナレバトテカヤ
花巻　宮沢先生行.
AM　レコード
PM　水涸ノ組立
4. 45　花巻　for
先生ハ快クお会シテ呉レル
与ヘラレタ　実ニ、我師、我友人
知己之ハ余リニ馬鹿者ヨ
横黒線（注１）ノ夕ノ山川の夏ハ清シ！
予備欄「花巻宮沢先生へ」、特別事項欄「歸宅」

「先生は喜んで迎へて下さつて、色々とおさとしを受け、その題も『水涸れ』と命名して頂き、クライマックスの処に篝火（かがり火）を加へて下さつた。この時こそ、私と先生の最後の別離の一日であつたのだ（14）。余りに有り難い一日であつた。」これを最後に、甚次郎は賢治に会うことはなかったという（注２）。

昭和６年２月（注：賢治はこの年から東北砕石工場技師属託となる。）には、甚次郎は賢治から「わたしはもうこの生命が終り近い」という趣旨の生前最後の手紙と『春と修羅』を受け取った。そのとき賢治は病床に臥していて盛んに石灰岩の事などを述べ、残念だ身体が弱くて残念だとつぶやいて居られたという。

以上述べた甚次郎と生前の賢治に関わる略歴（大正15年から昭和８年）は、表１のようになる。

注１：現在のJR北上線（岩手県北上市にある北上駅と秋田県横手市にある横手駅を結ぶ鉄道路線）

注２：『土に叫ぶ』の「先生逝かる―清浄なるかな宮澤先生―」に、「昭和三年（注３）にも一度お目にかゝつて教へを受けた。」（２）とあるので、賢治の資料には記載されていないが、甚次郎が生前の賢治を訪れたのは「３回」であると考えられる（注４）。昭和２年８月８日が最後の出合いではない？　甚次郎の記憶違いか？

注３：昭和３年８月14日訪問との記載がみられる（18, 22）。同年８月10日、賢治は過労により病臥・自宅療養に入り羅須地人協会は休止状態であった。誤解を恐れず推察すると、甚次郎はこの年に賢治の見舞いを兼ねて自宅を訪問したのか？

注４：北水会報第142号（17）で「昭和３年　不明花巻に賢治を訪問する（４回目）を削除」としたが、「甚次郎は昭和３年８月14日に賢治を訪問した」とすると３回訪問したことになる。この点は検証する必要がある。

賢治の教訓「小作人たれ」「農村劇をやれ」

昭和２年３月８日の午後、恩師宮澤賢治先生を訪問した時に、先生は「君たちはどんな心構えで帰郷し、百姓をやるのか。」とたづねられた。私は「学校で学んだ学術を、充分生かして合理的な農業をやり、一般農家の範になりたい。」とある意味模範的な返事をしたところ、先生は足下に「そんなことでは私の同志ではない。（中略）君たちに贈る言葉はこの二つだ―

　　小作人たれ

　　農村劇をやれ」

と、力強く言はれたのである。

千葉 恭は昭和２年３月８日に下根子桜を訪ねてきた甚次郎本人を直接見ている（16）。２人の近傍に居合わせた千葉 恭によると、「甚次郎は賢治から大きな声で“どやされた”ものであつた。しかし“どやされた”けれども、普通の人からのとは別に親しみのある“どやされ方”であつた。」という。

「どやす」は「叱る」「怒る」「怒鳴る」の意味があるので、その時に賢治はかなり興奮して大きな声で甚次郎に語ったものと想像される。「そんなことでは私の同志ではない！‥大馬鹿だ！」と強い口調での断言、また「賢治はとても気持の変化のはげしい人だった」、「賢治は怒りっぽい面もあったと言えそうだ」、「賢治はまた感情をあらわに出す人でもあった。喜びにつけ悲しみにつけ七面鳥のように顔色をかえた。」との証言（９, 16）は、賢治の人間性の一面を表している。

その賢治との一度の出会い、そして「小作人たれ」「農村劇をやれ」との賢治の確信に満ちた言葉が、甚次郎の心を揺さぶり生涯を決定づけた。甚次郎は賢治を人生の恩師と呼び、賢治の訓えを終生の信条とし、百姓として故郷の村で生きて行くことを決意することになる。

ここで「小作人たれ」「農村劇をやれ」との言葉、その背景にある賢治の足跡を辿ってみたい。

「小作人たれ」

「本当の百姓」になる。花巻農学校教師時代、賢治は生徒たちに「村に帰れ、農民になれ」と呼びかけたが、賢治自身も「本当の百姓」になり農民の生活を少しでも楽にし「農民の生活に寄り添いたい」と思い続けた。

花巻農学校を辞めた賢治は「農民（百姓）＝小作人」と考え、当時我が国の「農」を支えていた「小作人」こそまことの「農民」であり、小作人となって粗衣粗食過労と社会的経済的圧迫を経験することにより「人間の真面目」が顕現されるという。そして甚次郎に「黙って十年間、誰が何と言おうと、実行し続けてくれ。そして十年後に、宮澤が言つた事が真理かどうかを批判してくれ。今はこの宮澤を信じて、実行してくれ。」と諭した。

このように賢治は甚次郎に向って「小作人たれ。農民として真に生きるには、まず真の小作人になることだ。誰が何と言おうと私を信じ実行してくれ。」

と力強く語った。このような賢治の気魄に満ちた口調や妥協を許さない姿勢に驚きを感じる。賢治の人柄については物静かで思慮深い印象を勝手に抱いていたので、その時の「賢治の気性の激しさ」(16)には幾分か違和感を覚える。

甚次郎は賢治の懇々とした言葉に深く感動し、「この訓へこそは私には終生の信條として、一日も忘れぬ事の出来ぬ言葉である。」と述べている。そして甚次郎は郷里に帰り「小作人」となり、愚直なまでに生涯賢治の言葉を実行した。

「農村劇をやれ」

賢治は演劇に大変関心を持っていた。賢治の演劇熱は、後に羅須地人協会時代に甚次郎に向け「農村劇をやれ」とすすめる言葉につながる。

賢治は大正10年12月３日に稗貫農学校（後の花巻農学校）の教師になり、当時年に１回開かれた学芸会で、自作の演劇を生徒たちに上演させた。初稿の「植物医師」の上演は実現しなかったが、大正12年５月の校舎新築祝賀記念式で上演し、翌年には改作して再上演している。その後「バナナン大将（饑餓陣営）」、「ポランの広場」、「種山ヶ原の夜」が加えられた（７）。

国民高等学校（大正15年１月）（９）では、賢治は「農民芸術論」の講義を担当した。「農民芸術概論」として「農民芸術の興隆」、「農民芸術の本質」、「農民芸術の分野」、「農民芸術の主義」、「農民芸術の作製」、「農民芸術の批評」を講義し、「おれたちはみな農民である。ずゐぶん忙がしく仕事もつらい。もつと明るく生き生きと生活する道を見付けたい。」、「農民と云わず地人と称し、芸術と云わず創造と云いたい。」、「我等は一緒にこれから何を論ずるか。」、「世界全体幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない。」、「われらは世界のまことの幸福を索ねよう。求道すでに道である。」と述べている（13）。この「農民芸術概論」の講義をもとに羅須地人協会の講義教材として「農民芸術概論綱要」が起稿された（大正15年６月頃）。

大正15年４月１日の岩手日報「新しい農村の建設に努力する」(17) で、賢治は「農村は経済的にも種々行き詰まっているので〈農村経済の勉強と耕作〉をし、生活すなわち芸術の生きがいを送りたい。」と語っている。

昭和２年２月１日の岩手日報「農村文化の創造に努む／花巻の青年有志が／地人協会を組織し／自然生活に立返る」(17) では、羅須地人協会の開設について述べ、さらに農民劇や農民音楽を創設し、農民劇の試演として「ポランの広場」を上演する準備を進めていると報じている。このように賢治は「本当の百姓」になりたいとの想いで農学校を退職し、羅須地人協会において農学校卒業生や近隣の青年を集めては自作した農村劇の稽古にはげんだ。

賢治は甚次郎に言った。「農村の骨子は小農・小作人にある。〈農村劇をやれ〉ということは、単に農村に娯楽を与えるという小さなことではない。農業者は天然の現象に絶大なる芸術を感得し、さらに自ら農耕に生活行事に芸術を実現しつゝあるのだ。それを磨き生かし成果した暁には、農村も農家も楽しく美しい日々を送ることができる。そこから社会教育・農村の娯楽・農民啓蒙・婦人解放・個人主義打開が実現されるのだ。農民個々のもつ得意芸を総合し統制して一つの芝居をやれば生命をもってくるのだ。村を舞台（土舞台）とし村の生活を脚本とし、それらを芝居へと昇華させ生命を与えるのだ。その生命力が大事なのだ。その生命力をもって農村の事業や経済文化を向上させなければならない。」

これは甚次郎に向けた賢治の教諭であり、賢治が「農民芸術概論」で述べている「農民芸術」の実践である。その根底には先に述べた賢治の演劇に対する深い関心と経験があった。

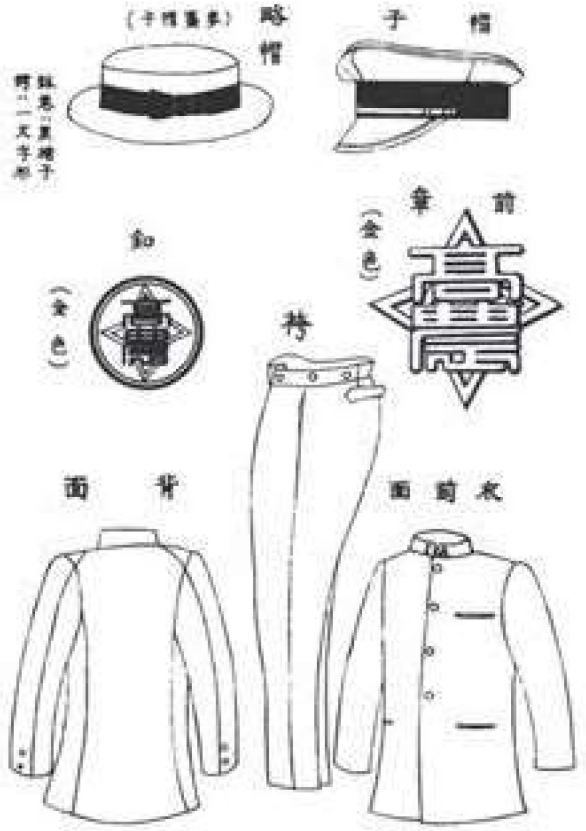

写真６　盛岡高農生の正装：サージの制服や制帽・徽章など指定されていた。
農学別科生と本科生の生徒は同じ正装

写真７　作業着姿の生徒（農作業や実験実習の服装）
カーキ色の作業服とゲートルを身につけた農作業姿：剪定作業（左）と苺栽培（右）

甚次郎、村へ帰り百姓となる

甚次郎は花巻で賢治と出合い、賢治の教訓に感動し帰農の決意を固め、盛岡に別れを告げて郷里鳥越部落（最上郡稲舟村大字鳥越：現新庄市）に帰った。懐かしい村の自然や人々の変わらない営みを懐かしく思いながらも、都会と農村との隔絶や都会による農村搾取について改めて思いをはせた。

帰郷した甚次郎は父親から六反歩の旱魃田を借り、自宅から数百メートルはなれた場所に３坪の小さな小屋を建て、羊を飼う生活から小作人生活に入った。彼は農装に変身した。盛岡高農で身にまとっていたサージの制服（注）（写真６）（１）・カーキ色の作業服など（写真７）を脱ぎ捨て、黒木綿の股引・縞のハッピ・粗織紺の前掛・山刀切帽にかえ、ハンバキ（脚絆：ゲートル）をはき、藁靴をはいて働き始めた（写真８・写真９）。甚次郎はその農装でどこへでも立ち歩き、「農装の姿で活動を始めた時の嬉しさと、父から六反歩の旱魃田を許された時の喜びは何と言つて言ひ現してよいかわからぬ。」と回顧している。

写真８　農装の甚次郎

写真９　農装の甚次郎

注：サージ（serge）は、もともとは梳毛糸（羊毛の長い毛から作った滑らかな糸）を使用し綾織で織った毛織物で、セーラ服や学生服に多用されている。

甚次郎、人生のプロローグ

甚次郎の帰郷（昭和２年４月）、それは彼の人生のプロローグでもあった。鳥越部落に帰った甚次郎は、農民生活の向上と農村文化・芸術の確立に生涯をかけて取り組むことになる。

郷土・鳥越部落

甚次郎は、郷土鳥越部落の古来からの歴史や鳥越八幡神社・水田開発・戊申の役・村人の生活について詳細に述べ、「我が郷里だ、我が墳墓の地だ、清くあたゝかく安らけき揺籃の地であり、この川この山この野良のほとりに生まれたる奇しき縁、尊き契、私にはこゝに理想の源あり、こゝに愛の泉あり、ここより真の黎明輝き出さんと、永しへにこの鳥越を愛し讃へんとして奮起したのである。」それは昭和２年４月のことであった。

このように帰郷した甚次郎は、郷里である鳥越部落を誇りに思い讃美している。小作人となった農装の甚次郎からは、未来への意気込みや羽ばたきが感じられる。

鳥越倶楽部の結成と村芝居

甚次郎は賢治に誓った農民劇の実現のために、村の青年たちを集め、「鳥越倶楽部」を立ち上げた（昭和２年４月25日）。会費も会則もない綱領は：

一　天皇陛下の御光の下に、鳥越部落彌栄に全力

を尽さん
二　我等は郷土文化の確立、農村芸術の振興に努めん
三　我等は農民精神を鍛錬し、以つて農民の本領を果たさん

鳥越倶楽部のメンバーは休日に農業について勉強したり、故郷をより深く識るためにドイツのワンダーフォーゲル式に山や谷や近隣の部落を歩き回った。それによってメンバー相互の絆が強くなり、更に倶楽部の活動目標がはっきりしてきた。その活動の中で甚次郎は、代表作 農村劇『水涸れ』を発表した。

農村劇『水涸れ』

６反歩の小作人になった甚次郎は、粗衣粗食で家の仕事をしながら自分の田を耕し田植えが終わる頃、村を旱魃が襲い苗は枯れ旱害になった。そのため部落では水争いがひん発した。旱魃・旱害・水争いを経験した甚次郎は「水掛（注：田圃に水をやること）」の重要性を痛感した。甚次郎は小作人になってはじめて「百姓の辛苦」を身をもって経験し、同時に「百姓の偉大さ」に敬虔の気持ちを抱いた。

倶楽部の例会で「お盆かお祭りにお互いで作つた劇をやろうではないか。」との発案があり、「脚本は村の生活をそのまゝすればよい。」との賢治の助言を受け、脚本「水掛と村の夜」を書いたが、物足りなく満足できるものではなかった。「かういふ時こそ宮澤先生を訪ねて教を受くべきだ。」と花巻下根子桜で独居自炊していた賢治を訪ねた（注：昭和２年８月８日）。

初舞台

賢治の助言で農村劇『水涸れ』の脚本が出来上がり、青年たちは雨の日も風の日も26回18日間熱心に稽古に打ち込んだ。村の例祭の間の公開（９月15日）は部落総代の許可が下りなかったため、予定より早い９月10日に上演することになった。

公開の場所は鳥越八幡神社（写真10）の境内。舞台は賢治の助言に従って、みんなで手作りした土舞台（写真11）である。当日は600余名の大衆が土舞台の前に参集し、公演は大成功であったという。これを皮切りに鳥越八幡神社境内の土舞台で多くの農村劇が実施された（写真12）。

甚次郎は「ミレーを愛し崇拝する。何故ならミレー自身は立派な小農でありながら、あの聖い美しい、そして祈りのこもつた名画を創り上げたからだ。土の美の表現だ。」と語っている（４）。「落穂拾い」や「晩鐘」はミレーの有名な作品である。甚次郎は農村劇「水涸れ」公演の序幕では、最も貧しい農民が行うつらい仕事「落穂拾い」を舞台面に表した。落穂拾いの唱歌と言葉に合せて、刈り取りの終わった畑に落ちている一穂一穂を３人の娘が拾っている風景である。そのシーンでは、「労働（ちから）、労働（ちから）いと聖き労働（はたらき）のみのりよ」「我が祈り通へりこの一粒一粒に」「汗・汗いとも尊き汗の結晶よ」と祈りを捧げた。

また、「晩鐘」は、アンジェラスの晩鐘が鳴る夕陽の畑、農夫婦が農作業をやめて家路に就こうとする時、頭を垂れて静かに感謝の祈りを捧げる様子を描いた作品である。「最上共働村塾」の修了式では授与された修了証書には、ミレーの「晩鐘」の絵画が描かれていた。甚次郎は自身貧しい小作百姓であるが故に、これらのミレーの絵に心引かれたのであろう。

甚次郎は農民劇『水涸れ』で何を訴えたかったのか

甚次郎は初舞台で次の様な口上を述べている（２）。

「鳥越の皆様方よ、私ども倶楽部は芝居をやるために結成したのではない。鳥越を、神社を中心とし

写真10　新庄にある鳥越八幡神社（国指定重要文化財）

写真11　農村劇を上演した鳥越八幡神社境内の土舞台

て住み良い美しい村にしたい。そして若い者も、大人も、仕合せに、たのしい日々が送られるようにしたいと願う念願から、まず私どもの身を修めつつ楽しみつつ、また皆様方に私どもの心もちをわかっていただき、さらに協力していただき、この尊い農業を心から精出して日本のために尽くしたいのであります。今晩の私どもの芝居『水涸れ』も、無意味に河原で水喧嘩をする有様を舞台に表したのではなく、将来水涸れに対してはこうしたらよいのだろうということを、皆さんにわかっていただきたいのであります。面白いときには笑ってください。涙の出るような場面には心ゆくまで涙を流して泣いて下さい。そうだ、ほんとうだ、と感じたときには、そうだ、ほんとうだ、と声を挙げて叫んでください。」

「私たちの人生とは、農に生まれて農に生き、土に親しみ土に死んでいくものであり、その人生は何と尊いことか。農作業に疲れはて、水涸れに苦しみ、日々の糧もない。雨降りの中で働く私たちが、いま立ち上がらなければ、村の幸せも混沌とした世の中の幸せも訪れることはない。理想の村を願う若者の熱い思い、燃え上がる若者の血潮」（甚次郎作詞：第３幕合唱の要約）（２）

甚次郎は農民劇は単なる娯楽ではなく、「共同で助け合う精神」をもって「住み良い美しい村にすること」をみんなの心に染み込ませることであり、賢治が言われた「教化ということと、熱烈さと、純情さと、美を没却してはならない。」という言葉を信じ、「みんなで助け合いながら、みんなが幸せになることを願って、誠心誠意、素直な心で上演しただけです。」と語っている。

当時演劇は単なる娯楽であり自己表現の手段であると考えられていたが、農民劇『水涸れ』の上演によって、後日、水涸れに備えて貯水池が造築され水不足が解消されるなど、人々をかえ世の中を変えることが出来ることを実感したという。これこそが賢治が考えていた演劇の本当の意義だったのではないか。甚次郎はそう確信した。

甚次郎の考えた農民劇

『水涸れ』の公演を期に、甚次郎は賢治の「訓へ」どおりに、次々と農民劇を上演した（写真12）。倶楽部メンバーへの青年団による嫌がらせや迫害を受けたが、盆踊りで禁酒を示唆した『酒作り』、女子部も参加した『水涸れ』、満州への移民の必要性を訴えた『移民劇』、村の自給経済の確立と消費生活の合理化を図るために組合を結成する必要性を訴えた脚色劇『壁が崩れた』、秋田雨雀原作の『国境の夜』、『ベニスの商人』、その他義民劇や諷刺劇・選挙粛正劇など一年一作品ぐらいのペースで36回余り上演を行った（２,12）。

昭和２年４月25日：鳥越倶楽部の結成
昭和２年９月10日：農村劇『水涸れ』
昭和４年　　：農村劇『酒造り』
昭和５年９月15日：農村劇『移民劇』
昭和６年９月　　：農村劇『壁が崩れた』
昭和７年２月　　：農村劇『国境の夜』
昭和８年２月　　：農村劇『佐倉宗吾義民伝』
昭和８年９月21日：賢治逝去（享年37歳）
昭和９年　　：諷刺農村喜劇『結婚後の一日』
昭和10年12月　　：『ベニスの商人』
昭和10年　暮　　：選挙粛正劇『ある村の出来事』
昭和11年４月　　：農村劇『故郷の人々』『乃木将軍と渡守』
昭和12年１月10日：農村劇と映画の夕べ（塾閉鎖）
昭和13年　　：農村劇『永遠の師父』
昭和14年８月15日：農村劇『双子星』
昭和15年　　：二千六百年奉祝の舞踏と奉祝歌公演
昭和17年２月　　：農村劇『勇士愛』
昭和18年３月21日：『種山ヶ原』『一握の種子』
昭和18年８月４日：甚次郎逝去（享年35歳）

甚次郎は農民劇の要項を下記のようにまとめている。

一、われわれの農民劇は農村娯楽の整頓と綜合、すなわち芸術化を目標とすることを上げねばならぬ。
二、農民の寂しさと退屈とを救う社交機関にしたい。
三、農村人の教化訓練に役立たせ、結局に於いて農村文化の向上に帰せねばならぬものと信ずる。

「農民劇の目的意識は民衆芸術と協調する余地が存在するものでなければならない。最初は一般の観衆は無頓着で、単に興味本位で出発するのが自然で

写真12　土舞台で上演中の農村劇（11）

あるが、やがて彼らがいつとはなしに10年かかっても良いから、その急所を自覚したとき、それが農民劇としての目的達成なのである。」と甚次郎は総括している。このような考え方は、賢治が「農民芸術概論」で述べていることの実践であり、賢治が考えていた演劇の本当の意義だったのではないか。

松田甚次郎の著書

甚次郎は多くの著書を著わしてる。『土に叫ぶ』羽田書店（昭和13年５月）、『土に生きる』社会教育協会（民衆文庫）（昭和13年11月）、『宮澤賢治名作選』羽田書店（昭和14年３月）、『新しき生活の建設』見前・二十一会猛士の会（昭和16年）、『村塾建設の記』実業之日本社（昭和16年１月）、『野に起て』言霊書房（昭和17年３月）、『続 土に叫ぶ』羽田書店（昭和17年12月）などである。

『土に叫ぶ』

甚次郎の活動を知った羽田武嗣郎（注１）は、甚次郎に10年の生活記録を執筆するよう依頼した。甚次郎は「鍬の人・働く人であり、語る人ではない」と一度は断ったが、羽田の熱意に動かされて生命を打込み執筆に取り組んだ。昭和13年５月、羽田書店から回顧録『土に叫ぶ』（２）が出版されるとベストセラーとなり、中央社会事業協会より文献賞を受け、また同年８月には新国劇（東京有楽座）で上演された。その結果、甚次郎の名は全国に知れわたり農民の鑑と高く評価された。

甚次郎は多くの著書を著わし、講演や講習・座談会などで各地を駆け回り多忙を極めた。そのため甚次郎はもはや「語る人：土から遊離したジャーナリスト」であり「土の人」ではないと批判された（12）。しかし甚次郎の「一介の小作農民・鍬の人」であるとの信念は生涯変わることなく、著書や講演によって「自分の日常生活を知つてもらうことである。」とし、「自分の生活をすべて知つてもらうことが、全国農村の更生運動には必要なのだ。私は毎年、年に一冊の本をこれからも生涯つづけて出版していくつもりです。私にとつて書くということは、それにふさわしい生活を毎日続けることなのだ。」（12）これが甚次郎の本意であろう（写真14）。

注１：羽田書店社長・元衆議院議員（明治36～昭和48）。元首相の羽田孜の父、元参議院議員の羽田雄一郎の祖父である。羽田武嗣郎は長野出身で、東北帝大で阿部次郎に師事、卒業後東京朝日新聞社に入社し記者となる。農村問題に情熱をかたむけた政治家であった。

『宮澤賢治名作選』

『土に叫ぶ』出版の翌年、昭和14年３月７日、同じ羽田書店から松田甚次郎編集の『宮澤賢治名作選（上・下）』（写真13）が出版された。この本は文部省推選となり、ベストセラーになった。賢治没後約１年の昭和９年、高村光太郎等編集の宮澤賢治全集 第３巻、引き続き昭和10年に第１巻（注２）が刊行されたが、まもなく絶版となり、その知名度は限定されたものであった。ところが『宮澤賢治名作選（49篇）』は、一般にはほとんど無名であった賢治の存在と作品を世の中に伝える役割を果たし、また甚次郎の名前も全国に知れ渡った。「宮澤賢治」を世間に広く伝えたのは、甚次郎の功績であると言っても過言ではない。

注２：宮澤賢治全集（第１巻～第３巻）、宮澤賢治著、高村光太郎・宮澤清六・藤原嘉藤治・草野心平・横光利一編、第１巻（詩）（文圃堂書店：

写真13　松田甚次郎編『宮澤賢治名作選 上』

写真14　土に叫ぶの碑（昭和54年建立）（12）

昭和10年)、第２巻（詩 坤巻）（十字屋書店：昭和15年)、第３巻（童話・寓話・劇）（文圃堂書店：昭和９年）

『村塾建設の記』

実業之日本社（昭和16年１月１日）から出版（４)。『土に叫ぶ』をもとに更に詳細に書いたものである。構成は「村塾の再建まで・起ち上る力・銃後と農村・野に伏して」からなり、甚次郎の人生観や思想、塾の精神や生活が克明に描かれている。特に「銃後と農村」には、戦時体制下における銃後の農村問題、皇軍と農村婦人・青年の責務、皇国と聖戦など、当時の時局に直面していた甚次郎の思想が記されている。

賢治は甚次郎に対して「農民として真に生くるには先づ真の小作人たることだ。小作人となつて粗衣粗食、過労と更に加はる社会的経済的圧迫を体験することが出来たら、必ず人間の真面目が顕現される。」と語り、甚次郎はその言葉に感動し、郷里鳥越に帰り「賢治精神」を実践した。

甚次郎は、疲弊した農村農民の生活を守るために、最上共働村塾を開設し、託児所や共同施設を設け、消費組合を組織した。禁酒や婦人の地位向上に力を注ぎ、衣類や味噌などの食品の自家生産や缶詰加工など自給自足的農業経営を実践し、賢治作品を紹介するため『宮澤賢治名作選』を編集刊行した。このように甚次郎は多彩な活動を行ない、賢治と同様に短い生涯を駆け抜けて行った。

次号では、農村劇活動以降の甚次郎の生涯、農村指導者としての活動などについて述べる。

武田純一北水会会長には写真10・写真11を提供して頂きました。感謝。

参考資料

１）盛岡高等農林学校一覧（大正12年～昭和２年）
２）土に叫ぶ: 松田甚次郎、羽田書店、1-10/27-30（昭和13年５月初版）
３）宮澤賢治研究：草野心平編、十字屋書店版、424-425（昭和14年９月）
４）村塾建設の記：松田甚次郎、実業之日本社、249-252（昭和16年１月）
５）宮沢賢治：佐藤隆房、冨山房、197-202（昭和17年９月）
６）土に叫ぶ：松田甚次郎、羽田書店、10（昭和17年12月第２刷）
７）年譜 宮澤賢治伝：堀尾青史、図書新聞双書、127-129（昭和41年３月）
８）文芸読本 宮澤賢治：河出書房新社、283（昭和52年11月）
９）宮沢賢治―地人への道―：佐藤 成、川嶋印刷、186-239（昭和59年10月）
10）年譜 宮澤賢治伝: 堀尾青史、中央文庫、260（平成３年２月）
11）北水会報 第141号（令和３年８月）
12）賢治精神の実践―松田甚次郎の共働村塾：安藤玉治、農文協、10/60/66/84-140/154-173/177-180（平成４年７月）
13）宮澤賢治外伝: 佐藤 成、でくのぼう出版、86/222-225（平成８年12月）
14）今日の賢治先生：佐藤 司、永代印刷出版部、93-94/350（平成20年１月）
15）土に叫ぶ 松田甚次郎が遺したもの：しんじょうの種project（平成27年３月）
16）本統の賢治と本当の露: 鈴木 守、有限会社ツーワンライフ、13-14/154（平成31年４月）
17）北水会報 第142号（令和４年１月）
18）新庄「最上共働村塾」の松田甚次郎：賢治とモリスの館 https://sakunami.exblog.jp/19426049/
19）甚次郎の来盛時期から言えること：みちのくの山野草 https://blog.goo.ne.jp/suzukishuhoku/e/f36435a1856e4ad71dc471b787ed71ee
20）賢治と一緒に暮した男：鈴木 守 https://blog.goo.ne.jp/suzukiyuai/e/b26a82f1bd4a15f0e1c72eb42f12c96b
21）ある後輩の12月25日赤石慰問 https://blog.goo.ne.jp/suzukishuhoku/e/44082cd4743edac9d26c873707 bac993
22）宮沢賢治と松田甚次郎 http://poo-takada.blogspot.com/2012/09/blog-post_7357.html
23）2027 S2/3/8の賢治宅訪問 https://blog.goo.ne.jp/suzukishuhoku/e/945e6a8cbc555f15846f3bab90427a4a